

山本七平著「帝王学 - 「貞観政要」の読み方 - 」日経ビジネス人文庫、日本経済新聞出版社
2001年3月1日刊を読む

帝王学 - 「貞観政要」の読み方 -

1. 「栄貴」より「徳行」こそ肝要

(1) 人間はその死後に直接的な影響力を行使することはできない。これは太宗とても同じである。では全く何の影響力もないのか、決してそうではない。その人の死後、人びとは何でその人を量るのか。それは権力でもなく、社会的な地位でもなく、いわば「人格的な力」ともいうべきものであることを、太宗は知っていた。そして、それを知っていたことが彼の生き方の基本であり、また『貞観政要』やその他の史書などを通じて、後代に大きな影響力をもち得た理由であろう。

(2) 「^{けつちゆう}桀^{あいに}紂は、是れ天子なりと雖も、今若し相喚びて桀紂と作さば、人必ず大いに怒らん」(教誡太子諸王第十一・第四章)。いうまでもなく夏の桀王、殷の紂王は暴君の代名詞だが、そのようなやつだといわれて怒るのは、どこの国でも同じであろう。ヨーロッパ人に、お前はネロやカリグラのような男だといえは怒る者はいても、賞讃と受けとめるものはあるまい。この場合、その者が、広大な中国の皇帝であったとか、大ローマ帝国の皇帝であったとかいうことは問題にならない。これはまた昔のことでなく現代でも同じで、「ニクソンのようなやつだ」とか「ヒトラーそっくりだ」といわれて喜ぶものはあるまい。権力や社会的地位はその人間が生きてその力を振るいうる限りのもので、それ以上の影響力はもち得ないし、人はそれだけで、その人を評価するわけではない。一見そう見えるのは、ただ彼が権力を持っているからにすぎないのである。

(3) 前記の太宗の言葉は、次のように進む。「^{がんかい}顔回・^{びんしけん}閔子騫・^{かくりんそう}郭林宗・^{こうしゆくど}黄叔度は布衣なりと雖も、今若し相称賛して、此の四賢の類すと謂わば、必ず^{まさ}当に大いに喜ぶべし」。これもいずれの国でも同じであろう。前の二人は孔子の弟子で徳行で有名、後の二人は後漢の時代の人で学徳が高く有名で、人びとに慕われたが生涯、仕えなかった人である。いわば皆、無位無官の平民、何の権力も権限も社会的地位もない庶民にすぎないが、いま、人をほめて、この四人の賢者に似ているといえは、その人は大いに喜ぶであろう。この点もまた、世界いずれの国でも変わりはあるまい。

(4) 「故に知る、人の身を立つる、貴ぶ所の者は、^た惟だ徳行にあり、何ぞ必ずしも栄貴を論ずるを要せん」。まさにその通りであり、栄貴などは問題にするに足りない。結局、問題となるのは徳行であり、その人への評価は最終的には「人格的评价」だけであり、ドラッカーの言葉を借りれば「品性」であろう。このあたりの太宗の考え方は、内村鑑三の『後世への最大遺物』に通ずるところがある。いわば、その人が後世に遺しうるのは「高尚なる人格に基づく生涯」だけであり、それ以外には何も無い。そして後代の人々が評価するものも実はこの点だけであり、それなるが故に、人は、桀紂のような奴だといわれれば怒り、顔回・閔子騫のような人だといわれれば喜ぶわけである。

2. なんじの誠を尽くせ

- (1)太宗は、このことを自戒していた。そしておそらくそれが、創業にも守成にも成功し、彼の生涯のさまざまな大業績を可能にした基本的な理由であろう。というのは、彼は決して無謬な人ではなかった。多くの過ちを犯したが、その指摘は喜んで受け入れた。だが、元来「無謬な人」などは存在しない。ただ人は権力や権限をもつと、たとえそれがどんな小さな場合でも、ある範囲における奇妙な全能感をもつものなのである。そしてそのまま権力・権限が大きくなると、その全能感が無限に拡大していく。太宗は自らを欠点の多い人間と自己規定し、常に自らを戒めていた。
- (2)「太宗、嘗て侍臣に謂いて曰く、夫れ鍋を以て鏡と為せば...」(任賢第三・第三章)につづく言葉は、太宗の絶えざる自戒を示している。「鏡があれば衣冠を正すことができる、同じように昔を鏡とすれば歴史によって世の興亡盛衰を知って自らを正すことができる。鏡にできる人を鏡とすれば、その人によって善悪当否を知ることができる。自分はこの三つの鏡で常に自らの過ちを正してきた。ところが今、魏徴が死んで、とうとう鏡の一つがなくなってしまった」と。そしてしばらくの間、涙を流して悲しんだ。
- (3)そして、詔を下していった。「昔は魏徴だけが常に私の過ちを明らかにし指摘してくれた。彼の死後は、たとえ過ちがあっても明らかにしてくれる者がいない。私が高んで、魏徴の生きていたときだけ非があり、今日はすべて是であることがあり得ようか。理由は、役人たちがむやみに順従して御機嫌を損じないようにと、はばかりしているのであろうか。私は、己を虚しくしてわだかまりをもたず、迷いを払いのけて内省しようとしている。いっても用いないなら、それは私の責任だから甘んじてそれを負う。しかし私が用いようとしても、だれもいわないのは、一体、だれの責任なのか。『斯れより以後、各々乃の誠を悉くせ。若し是非有らば、直言して隠すこと無かれ』と」。
- (4)そしてこのことが、逆に、太宗への人格的評価を高め、それが大きな治績をあげ、「貞観の治」として中国の政治的理想が達成された時代として後代に大きな影響を及ぼし、同時に『貞観政要』を通じてさらに広く深く、日本の民衆にまで影響を与えた理由であろう。

P207 ~ 211

[コメント]

唐の繁栄を築いた太宗の言動を伝えた「貞観政要」の山本七平先生によるわかりやすい解説書。やはり、「徳行」を積み「誠」を尽くすことが為政者に最も求められるのかと再認識。日経ビジネス文庫、大いに読むべし。

- 2012年9月6日 林 明夫記 -